

病害虫発生予報 第6号(9月予報)

平成23年8月31日
和歌山県

<予報の概要>

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 白葉枯病 トビイロウンカ コブノメイガ イチモンジセセリ 斑点米カメムシ類	やや少 並 並少 少 並 やや多		ハスモンヨトウ シロイチモジヨトウ	並 並
			カンキツ	黒点病 かいよう病 果実発病量 発病園数 夏秋梢発生量 ミカンハダニ チャノキロアサミウマ	並 やや多 多 多 やや多 やや多
トマト、 ミニトマト	黄化葉巻病	やや少			
野菜全般	アブラムシ類 及びウイルス病 コナガ ハダニ類 ミナミキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ	並 並 並 並	カキ	炭そ病 うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並 並 やや多 並 並
			果樹全般	カメムシ類	並

気象予報

1か月予報（予報期間 8月20日～9月19日 大阪管区气象台）

<特に注意を要する事項>

期間の前半は気温の変動が大きく、2週目は平年に比べ高くなる見込みです。

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わってでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温 (平年値) (°C)		月降水量 (平年値) (mm)	
	9月	和歌山	24.7	和歌山
	潮岬	24.4	潮岬	305

I. 水 稲

1. いもち病(穂いもち)

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の紀北地域における25株あたりの発病株数は、葉いもち1.1株(平年2.5株)、穂いもち0.0株(平年0.0株)とやや少なかった。
- ② 8月上旬の紀中地域における25株あたりの発病株数は、葉いもち0.0株(平年2.3株)、穂いもち0.0株(平年0.0株)と少なかった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① いもち病に感受性の品種(キヌヒカリ等)の作付ほ場では今後の気象推移に注意する。薬剤散布を行う場合は使用基準を遵守すること。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の紀北地域における25株あたりの発病株数は1.1株(平年1.9株)と平年並であった。
- ② 8月上旬の紀中地域における25株あたりの発病株数は0.1株(平年2.0株)とやや少なかった。
- ③ 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 上位葉への進展がみられるほ場は、薬剤防除を行う。
- ② 過繁茂ぎみのほ場では発生しやすいので、特に注意する。

3. 白葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の調査では発生が認められなかった(平年発病株率0%)。
- ② 9月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 常発地や台風等で冠水したほ場では発生に注意し、発病を認めたら薬剤防除を行う。

4. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたり生息密度は、紀北地域0.2頭(平年0.5頭)、紀中地域0.6頭(平年0.4頭)、紀南地域0.0頭(平年0.6頭)であった。
- ② 予察灯への8月の飛来数は4半旬現在、紀の川市3頭(平年3.0頭)、上富田町0頭(平年0.8頭)、那智勝浦町9頭(平年16.5頭)である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場内におけるトビイロウンカの分布はバラツキが大きいので、ほ場全体の発生状況を的確に把握する。
- ② 成・幼虫が5頭以上生息している株を認めたら薬剤防除を実施する。使用基準を遵守すること。
- ③ 本虫は株元に生息するので、薬剤が株元に十分到達するように散布する。

5. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたり被害葉数は、紀北地域0.1葉（平年2.6葉）、紀中地域0.0葉（平年4.4葉）であった。
- ② 蛍光灯誘殺箱（紀の川市）による8月の成虫誘殺数は8月3半旬現在、1頭（平年11頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 9月以降は被害葉率が高くても減収率は低い。また次世代幼虫の出現がないため、防除の必要はない。

6. イチモンジセセリ(イネツトムシ)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の25株あたりツトム数は、紀北地域0.1（平年0.2）、紀中地域0.0（平年0.1）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 8月下旬～9月上旬に蛹化し9月中旬以降に成虫となるため、防除の必要はない。

7. 斑点米カメムシ類(クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシなど)

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 8月上旬の本田での発生は、すくい取り調査（捕虫網20回振り）によると、紀北地域は発生ほ場率88%（過去9年の平均56%）、平均成虫数23.1頭（同3.3頭）、紀中地域は発生ほ場率75%（同78%）、平均成虫数4.0頭（同8.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 晩生品種（ヒノヒカリなど）の多発ほ場では、乳熟期～糊熟期にMR・ジョーカーEWなどで防除を行なう。使用基準を遵守すること（「防除指針」参照）。

II. 野菜・花き

<トマト、ミニトマト>

1. 黄化葉巻病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀北地域の家庭菜園を含む露地栽培トマトおよびミニトマトにおける発生ほ場率は8月4半旬現在、9%（過去5年間の平均発生ほ場率13%）とやや少なかった。
- ② 紀中地域の家庭菜園を含む露地栽培トマトおよびミニトマトにおける発生ほ場率は8月4半旬現在、21%（過去5年間の平均発生ほ場率28%）とやや少なかった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本ウイルス病害の媒介虫であるタバココナジラミの徹底防除に努める。
- ② ハウス栽培では防虫ネット（目合い0.4mm以下）で開口部全てを被覆する。
- ③ 感染株は見つけしだい根元から抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋で密封して枯死させる。
- ④ 家庭菜園を含む露地栽培トマトについては、栽培終了後は速やかに全株を引き抜き、野積みにした上に古ビニルなどで2週間以上覆ってコナジラミ

- ミ類を死滅させる。
- ⑤ 雑草はコナジラミの生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類およびウイルス病（露地野菜全般）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬現在、モモアカアブラムシの発生ほ場率0%（平成9.4%）、寄生葉率0%（平成0.7%）、ワタアブラムシの発生ほ場率13%（平成13%）、寄生葉率0.6%（平成1.5%）であった。
- ② アブラムシ類の黄色水盤（紀の川市）への8月の飛来数は4半旬現在、33頭（平成41頭）と平成並である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① アブラムシ伝搬性のモザイク病には、アブラムシ類の防除対策としてシルバーマルチを行い、薬剤防除と併用する（「防除指針」参照）。
- ② ハクサイ等の育苗では防虫ネットを被覆して有翅虫の飛来を防ぐ。

2. コナガ（ダイコン、キャベツ、ハクサイ）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① フェロモントラップによる8月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市0頭（平成0.2頭）、和歌山市1頭である。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬現在、カンザワハダニの発生ほ場率25%（平成28.1%）、寄生葉率4.4%（平成5.4%）、ナミハダニの発生ほ場率0%（平成14.5%）、寄生葉率0%（平成2.7%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

4. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬現在、発生ほ場率62.5%（平成44%）、寄生葉率12.5%（平成18.5%）と平成並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また防虫ネットを被覆し、成虫の飛び込みを防ぐ（「防除指針」参照）。

5. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月4半旬現在、発生が認められなかった（平成発生ほ場率8.2%、寄生葉率1.1%）。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

6. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 紀北地域の露地栽培ナスでは8月5半旬現在、発生ほ場率0%（平成18.8%）、寄生葉率0%（平成1.4%）であった。

② フェロモントラップによる8月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市46頭（平成141頭）、和歌山市41頭、御坊市169頭（平成293頭）、印南町99頭（過去8年の平均54頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ふ化幼虫の集団が分散するまでの若齢幼虫期に防除するよう心がける。

② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

7. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① フェロモントラップによる8月の誘殺数は4半旬現在、紀の川市11頭（平成15頭）、御坊市192頭（平成96頭）、印南町59頭（過去8年の平均99頭）である。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 中・老齢幼虫になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢幼虫対象の初期防除に努める。

② 抑制エンドウでは、は種後40～50日間寒冷紗被覆を行うと被害が軽減される（「防除指針」参照）。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発病量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除）における8月中旬の果実発病度は37.9（平成35.6）、慣行防除区は1.4（平成1.9）と、いずれも平成並であった。

② 8月中旬の巡回調査によると、発病園率は54%（平成61%）、発病果率は12.9%（平成17.5%）、果実発病度は2.5（平成3.8）と、いずれも平成よりやや低かった。

③ 近年、放任園の増加や剪定枝の放置等により病原菌の密度が産地全域で高いと思われる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 8月中下旬に防除できなかった園では、9月上旬に早急に防除を行う。

② 枯枝除去や剪定枝の処理を徹底する。

③ 薬剤使用の収穫前日数などの基準を厳守する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発病量 やや多 発病園数 多
夏秋梢発病量 多

(2) 予報の根拠

① 8月中旬の巡回調査によると、果実発病度は0.5（平成0.6）と平成並、春葉発病の発病園率は37%（平成26%）と平成より高かった。

② 発病園では、春葉に加え夏秋梢での発病がみられる。

- ③ 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 罹病性品種の場合、付傷すると果実発病のおそれがある。台風等で強風雨が予想される場合には、事前に銅水和剤（炭酸カルシウム剤200倍加用）を散布する。
 - ② 夏秋梢の病斑は翌春の強力な伝染源となるので剪除に努める。
 - ③ 平成23年度発生予察注意報第3号及び防除技術情報第1号を参照する。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）の8月中旬における発生は認められず、慣行防除区発生量は平年に比べ少なかった。
 - ② 8月中旬の巡回調査によると、発生園率は55%（前年55%、平年53%）と平年並であった。寄生葉率は19.3%（前年14.4%、平年12.0%）、100葉あたり雌成虫数は57頭（前年44頭、平年26頭）と、いずれも平年に比べ多かった。
 - ③ 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤は年2回以上使用しない。
 - ② ミカンサビダニの発生にも注意し、本虫にも登録のある有効薬剤を選択する。

4. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除）における発生は、平年並であった。
 - ② 8月中旬の巡回調査によると、果実における被害園率は42%（前年42%、平年23%）と平年に比べ多く、100果あたりの寄生虫数は0.1頭（前年0.4頭、平年0.4頭）と平年並であった。
 - ③ 9月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 8月中旬以降に有効な殺虫剤を散布していない園および夏秋梢の多い園では、9月の発生に注意する。

<カ キ>

1. 炭そ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 8月中旬の巡回調査における「富有」の発病果率は0.0%（平年0.2%）、「刀根早生」・「平核無」の発病果率は0.0%（平年0.0%）と平年並であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発病枝や果実が見られる場合は剪除し、夕立や秋雨が続いたり、台風が通過したときには追加防除を行う。
 - ② 密植園の風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光をはかり、薬剤をかかりやすくする。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 8月中旬の巡回調査における「富有」の発病葉率は12.1%（平年19.3%）、「刀根早生」・「平核無」の発病葉率は0.5%（平年2.5%）と平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布する。
- ② 盛夏期には病勢は一時休止するが、秋期になり気温が低下すると再び活発になるので、二次伝染防止に努める。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 円星落葉病 やや多 角斑落葉病 並

(2) 予報の根拠

(2) 予報の根拠

- ① 8月中旬の巡回調査園においては発病葉は認められなかった。
- ② 昨年秋期の発生から、越冬量は円星落葉病ではやや多く、角斑落葉病では並と考えられる。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本病は樹勢が低下すると発病が助長される。
- ② 角斑落葉病は二次伝染を繰り返すので、多発園では発病後も防除を励行する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 8月中旬の巡回調査における「富有」の寄生果率は19.1%（平年16.4%）、「刀根早生」・「平核無」の寄生果率は2.4%（平年2.5%）と平年並であった。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 幼虫は主に果実とへたの間隙部に寄生しているので、薬液がこの部分にかかるように散布する。
- ② 薬剤が十分かかるように枝葉の混み合いをなくす。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 7月から8月上中旬までの予察灯における果樹カメムシの誘殺数は、果樹試験場（有田川町）およびかき・もも研究所（紀の川市）で平年より少なく、うめ研究所（みなべ町）で平年よりやや多かった。
- ② 8月中旬の巡回調査によると、カキの被害果率は「富有」・「刀根早生」・「平核無」ともに0%であった。また、カンキツ園への飛来はみられなかった。
- ③ ヒノキ花粉飛散数比（本年／前年）は7.2であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が多くなると考えられるため、果樹園への飛来は少ないと考えられる。

(3) 防除上注意すべき諸点

- ① 最新のカメムシ類発生状況は、県農林水産総合技術センターホームページの果樹カメムシ情報を参照する。
- ② 果樹園への飛来や被害がみられる場合には、速やかに薬剤散布を行う。
- ③ 台風の通過後に一時的に多くなることがあるので注意する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ホームページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujoyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujoyouhou.html)

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。